

# 『日葡辞書』の肥後方言

馬 場 良 二

キーワード: 『日葡辞書』、九州方言、熊本方言、「X、Ximo」の注記、秋山正次『肥後の方言』

要旨: 秋山正次『肥後の方言』(1979)には、熊本方言の語句リストがある。その148語のうち、『日葡辞書』にあったのは27語だった。これら27語に3語をくわえ、『日葡辞書』の記述を詳細に分析し、現代熊本方言での意味用法と比較した。

秋山が肥後方言だと言っている27語のうちの20語を『日葡辞書』は九州方言だと言っていない。16世紀当時は全国共通であった語が、その後、方言的な意味、語義を発展させていったのかもしれない。

もう一つ考えられることは、「X、Ximo」の注記は九州の方言語彙の中でも、とくに必要な場合にだけ付された可能性である。もともと『日葡辞書』はイエズス会士たちの日本語学習のために作成されたものであり、当時の日本語の客観的な記録、記述を目的として編まれたものではない。「この語、あるいは、この語義は九州独特なもので、使うときには気をつけよ」という語学上の実践的な意味合いの記号なのかもしれない。

目次: 1. 『日葡辞書』

2. 「ほがす」「なおす」「はいよ」

3. VOCABVLARIO と肥後方言

3-1 「X、Ximo」の注記があるもの

3-2 「X、Ximo」の注記がないもの: 現代熊本方言と意味の同じもの

3-3 「X、Ximo」の注記がないもの: 現代熊本方言と意味、

用法に違いが見られるもの

- 3-4 「X、Ximo」の注記がないもの：現代熊本方言と意味、  
用法がことなるもの

#### 4. 考察

##### 1. 『日葡辞書』

『日葡辞書』のもともとのタイトルは、図のとおり、VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM com adequação em Portugues, feito por ALGVNS PADRES, E IRMÃOS DA COMPANHIA DE IESV.であり、直訳すると、「イエズス会の神父と修道僧によるポルトガル語の説明つき日本語の語彙集」となる。以下、VOCABVLARIO とする。見出し語が32,800語で、1937年に大武和三郎が『葡和新辞典』を出版するまでは、もっとも見出し語の多い「日本語-ポルトガル語辞書」だった。刊本は、英国のオックスフォード大学ボードレイ文庫、ポルトガルのエヴォラ公立文庫、フランスのバリ国民図書館、マニラのサンドミンゴ修道院に1部ずつ、計4部、写本はポルトガルのアジュダ文庫に1部があり、ここでは、オックスフォード大学ボードレイ文庫のものを参考にしている。

VOCABVLARIO の冒頭には「PROLOGO (はじめに)」があり、続いて「Algũas aduertencias neceffarias pera o vfo, & intelligencia deste Vocabulario. (この辞書の使用と理解のために必要なお知らせ)」がある。そこには、方言語彙の取り扱いに関する以下のような記述がある。

Ordinariamente quando o vfo da palaura nas partes do Cami he diferente do de cà deftes reinos do Ximo, ou de outras partes, dizemos no Cami fe diz a fsi, ou fe vfa defta maneira, &c. (通常、Cami の地方でのことばの使い方がこちら側の Ximo の国々やほかの地域と異なる場合は、Cami ではこう言う、このような使い方をすると記した) Quando fomite fe vfa nefte Ximo, pomos no cabo da palaura, ou da declaração della hum, X. (Ximo でしか使われない場合は、その語の後かその語についての記述の後に X. をおいた) quando nem em todo Ximo, nem em todo o reino de Iapão o fentido he corrente, pomos, (alicubi) (Ximo 全体でもなく、日本の国の全体でもなく通用している意味のときは、alicubi (ある地域で) と記した)

ここで言う Cami (カミ) は近畿地方のこと、Ximo (シモ) は九州地方のことである。

『邦訳 日葡辞書』の「解題」には、「方言注記のあるのは465語である。その大部分は下の語が占める。」とある。465語の大部分が九州方言だということになる。

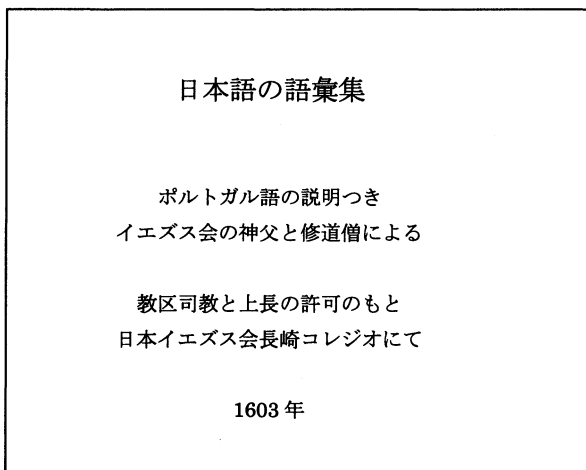
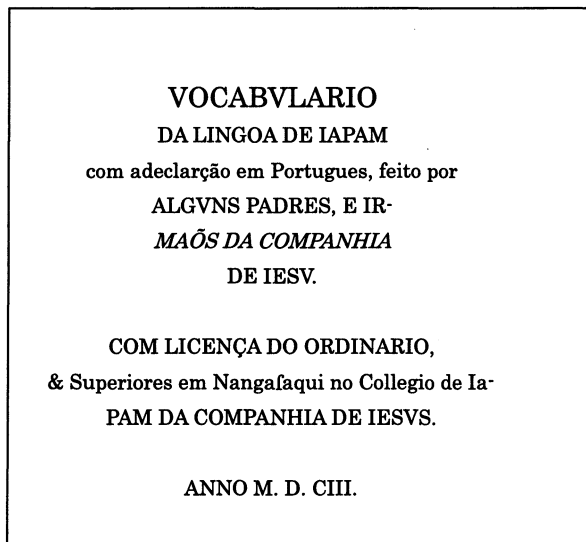


図 VOCABVLARIO の扉の翻字と翻訳

## 2. 「ほがす」「なおす」「はいよ」

熊本で日頃よく耳にする語を VOCABVLARIO で調べた。「Fogaxi (ほがす)」「Nauoxi (なおす)」「Fairiō (はいよ)」の3語である。

VOCABVLARIO における動詞の見出し語は連用形で、その後に、終止形の活用語尾、過去の助動詞「た」がついた語形の語末部分が続いている。

まずは、「穴をあける」意の「Fogaxi」である。

Fogaxi, u, aita. *Furar, ou abrir buraco. X.*

九州の方言であり、「掘る、穴をあける」の意だとある。現代熊本方言と同じ意味である。

「Nauoxi」の語義には、「*Emendar a falta.* (欠陥、欠落をなおす)」、そして、「*Mudar a cou/a a outro lugar* (物をほかの場所に動かす)」の二つがある。第一義は現代の共通語の「なおす」の語義と同じだと言えるが、第二義は現代の共通語にはない。「Nauoxi」には、見出し語の後にも記述の最後にも「X.」の注記はついていない。16世紀には二義ともに標準的であり、その後第二義が九州で「かたづける、しまう」の意味に変化していったのだろう。

VOCABVLARIO に、「ください」の意味の「はいよ」はなかった。「はいよ」の語源と考えられる「Fairiō (拝領)」を見ると、

Fairiō. Vogami, riōzuru. i, Tamauaru. *Receber algũa cou/a de pe//oa nobre.*  
(身分の高い人から何かを受ける) *Vt, Catanao fairiō furu. Receber catanao dalgum senhor, ou pe//oa nobre.* (誰か領主か身分の高い人から刀を受ける)

とある。「Catanao fairiō furu.」の例文とともに「Vogami, riōzuru」、「Tamauaru」の語義と同じだという記述がある。しかし、「ください」の意味、用法があるという記述は見られないし、「X.」の注記もない。VOCABVLARIO の記述が16世紀の日本語を完璧にうつしているとは考えられない。しかし、その記述を見るかぎり、現在、熊本、九州に特徴的だと思われる語の使い方がそのまま16世紀の熊本、九州にもあったとは言いがたいことがわかる。

これら3語のうち、「Fogaxi」の記述には「X.」の注記があり、その意味、

用法は現代熊本方言と同じである。「Nauoxi」「Fairiõ」の2語には「X.」の注記がなく、前者の語義のうち一つは現代共通語と同じで、もう一つの語義「物をほかの場所に動かす」が現代熊本方言に残ったようだ。「Fairiõ」は、16世紀にはなかった語義が熊本方言に発生し、今日まで続いている。

### 3. VOCABVLARIO と肥後方言

秋山正次『肥後の方言』（1979）には、熊本方言の語句リストがある。名詞が76、動詞が40、形容詞が13、副詞が9、助辞などが10、これら合計148のうち VOCABVLARIO にあったのは「Cobu, Vacudô, Vanguí, Yeda, Voro, Muzô ; Benifaxiyubi, Vôdoxi, Fu, Fauaqi, Vozomi, Yezui, Atadani, Igaua, Firacuchi, Baxi ; Icon, Nemari, Tabai, Bacai, Sacaxij, Susudoí ; Fiõrõ, Fõgueta, Iinben, Xicori, Xebiracaxi」の27語だった。現代において肥後の方言だと考えられるこれら27語を、16世紀のイエズス会士たちはどのようにとらえていたのだろうか。「X.、Ximo」の注記があるもの6語、「X.、Ximo」の注記がなくて現代熊本方言と意味の同じもの9語、「X.、Ximo」の注記がなくて現代熊本方言と意味、用法に違いが見られるもの7語、「X.、Ximo」の注記がなくて現代熊本方言と意味、用法がことなるもの5語、にわけて見ていく。

#### 3-1 「X.、Ximo」の注記があるもの

27語のうち、「X.、Ximo」の注記があったのは「Cobu, Vacudô, Vanguí, Yeda, Voro, Muzô」、秋山の表記では「コブ、ワクド、ワンギ、エダ、オロ、ムヅカ」の6語である。

6語うちの3語「コブ」「ワクド」「ワンギ」は、VOCABVLARIO の示す語義と秋山にある語義とが同じである。

Cobu. *Aranhas grandes.* (大きい蜘蛛) X.

Vacudô. *Sapo grande.* (大きい蛙) X.

Vanguí. *Fazerem diuorcio os ca/ados por mais não poderem.*

(もうどうしようもなくて夫婦が離婚する) X.

一方、「Yeda (エダ)」を VOCABVLARIO でひくと、

*Yeda. Ramo. ¶ Item, Quarto de animal. ¶ Item, Braço. Vt, Yedauo vchivoru. No Ximo quebrar o braço: & no Cami quebrar as pernas. ¶ Yedauo tauomuru. Dobrar, ou inclinar pera baixo os ramos.*

とある。

「Yeda (エダ)」の語義は三つ、「Ramo (枝)」、「Quarto de animal. (動物の四本足)」、「Braço. (腕)」で、例文に「Yedauo vchivoru. (枝をうち折る)」、その訳として「No Ximo quebrar o braço: & no Cami quebrar as pernas. (Ximo では腕を折る、Cami では足を折る)」、さらに、「Yedauo tauomuru. (枝をたをむる)」、その訳として「Dobrar, ou inclinar pera baixo os ramos. (枝を折る、あるいは、下のほうに引っ張る)」とある。「Yeda」自体は方言とは認識されていないが、「Braço. (腕)」という語義に「X.」がついている。秋山によると、「平安時代の倭名類聚抄という本に「肢」の字に「エダ」とよみがある。もともと人間の体の「枝」みたいな手やあしをすべてエダとிட்டのであろうが、いま九州では腕、近畿ではあしと分化固定している。」ということである。九州には「エダ」という語の古い語義が16世紀にも残っており、現在まで続いていることになる。

VOCABVLARIO での「Voro (オロ)」の記述は、以下の通りである。

*Voro. Adu. Mal, ou imperfeitamente.* (副詞。悪く、あるいは、不完全に)  
*Vt, Voroyoi coto. Cou'a que não he muito boa, ou mal feita.*  
 (あまりよくないこと、あるいは、できそこない) X.

X.の注記から「Voro」が九州方言だと認識されていたことがわかる。また、「Voroyoi」という言い方についての記述があり、この言い方が16世紀からすでに使われていたことがわかる。ただ、「Voroyoi coto (オロヨイコト)」の「mal feita (できそこない)」という語義は現代の熊本方言と同じであるが、「Cou'a que não he muito boa (あまりよくないこと)」という語義は現代の熊本方言にはない。

秋山には、「かわいい奴 (やつ) の意で、今でも熊本などでムゾカとかムジョカ・ミゾカという。」「かわいいこととかawaiiそうなことは紙一重で、古典語の「かなし」にも両意がある。無慙・ふびんな・awaiiそうな・awaiiと

変化したのが今の熊本の方言。」とある。この記述のとおり、「Muzô」に対する VOCABVLARIO の記述は、同情、あわれみであり、「かわいい」はあらわれていない。

Muzô. *Palaura com que se mostra ter piedade, & compaixão dalguem.* (誰かをあわれんでいることや同情していることを示すことば) X.

これら6語のうち「Cobu, Vacudô, Vanguí」の3語の語義に変化は見られない。一方、「Yeda」では「枝」「動物の四本足」「腕」の三つの語義のうち、「動物の四本足」の意はすたれて、「枝」「腕」の意のみが熊本方言に残ったようである。「Voro」では、「Voroyoi」という表現が「できそこない」という意味だけを持つようになった。また、VOCABVLARIO の時代、「Muzô」にはまだ「かわいい」という意味が生じていなかった。

### 3-2 「X.、Ximo」の注記がないもの：現代熊本方言と意味の同じもの

秋山が『肥後の方言』で熊本の方言だとし、かつ、VOCABVLARIO に採録されていた27語のうち、21語には X.、Ximo の注記がなかった。これらの21語のうち現代熊本方言と意味が同じだと考えられる9語「Benifaxiyubi, Vôdoxi, Fu, Fauaqi, Vozomi, Yezui, Atadani, Igaua, Firacuchi, Baxi」、秋山の表記では「ベニサシ、トリオドシ、フ、ハワク、エズカ、アタジャー、イガワ、ヒラクチ、バシ」に関してこの3-2で、現代熊本方言とは意味、用法に違いが見られる7語「Iccon, Nemari, Tabai, Bacai, Sacaxij, Susudoj」「アイコン、ネマル、タポー、バカウ、オズム、サカシカ、スドカ」に関しては3-3、現代熊本方言とは意味、用法がことなると考えられる5語「Fiôrô, Fôgueta, Iinben, Xicori, Xebiracaxi」に関しては3-4で考察する。

九州をふくむ西日本一帯で使われている「ベニサシユビ」は、VOCABVLARIO に、やはり「薬指」の意味でのっている。

Benifaxiyubi. *Dedo com que poem o rebique. i. O dedo do anel.*  
(それで化粧をするときの指。つまり、指輪の指。)

秋山によると「オドシ」は「鳥獣をオドスもの一般を指す。鳴子・鉄砲・光る紙のほか、いわゆるカカシも含まれる。」とあり、VOCABVLARIO では、

*Vôdoxi. E/pantalho.*

とある。「Espantalho」とは、「espantar (驚かせる)」を語源とする語で、「かかし」や「鳥獣をオドスもの一般」のことである。

『日本国語大辞典』には「ふ」という項目があり、その「方言」の欄によると、「運。運命。めぐり合わせ。」の意味でこの語を使う地方は関東から西に広く分布している。16世紀の日本でも、熊本、あるいは、九州だけで使われていた語ではないだろう。VOCABVLARIO でも、以下のように「Fu」の語義は「運」あるいは「幸運」であるとしている。

*Fu. Dita, (運、幸運) ou fortuna. (運、幸運) ¶ Funo yoi, l, varui fito, Homem ditofo, ou mal afortunado. (運のよい人、あるいは、悪い人)*

「ほうきで掃く」の意の「Fauaqi (ハワク)」にも変化は見られない。

*Fauaqi, u, aita. Varrer. (ほうきで掃く)*

目をさますことを「オゾム」という。VOCABVLARIO での記述は、以下のとおりである。

*Vozomi, u, ôda. E/pertar do sono. (眠りから目をさませる) ¶ Itê, No cami, Ficar espantado, ou sobre falteado. (同じく、Cami では、驚く、あるいは、びっくり仰天する)*

VOCABVLARIO のころ、Cami では「Vozomi」に「驚く」の意味もあったということになる。

「恐ろしい、こわい」意の「Yezui (エズカ)」を見ると、



Yezui. *Cou/a medonha, & temero/a*

とある。直訳すると、「こわい、恐ろしいもの／こと」となる。

「急に、にわか」の意の「Atadani」の記述は、

Atadani. *Adu, i. Niuacani. De repente.*

である。「副詞で、「にわか」と同義」とあり、ポルトガル語の訳として「De repente (突然に)」があげられている。

今でも熊本では、「井戸」を意味する「イガワ」ということばが使われている。VOCABVLARIO には、

Igaua. *Melius, Inomoto. Poço.* (井戸)

とある。「Melius」とはラテン語で「よりよい」という意味で、「イガワ」よりは「キノモト」のほうが望ましい語だといっている。『古語大辞典』によれば、「キノモト」とは「井戸」のことである。

九州中北部一帯で、マムシのことを「ヒラクチ」という。

Firacuchi. *Bibora.* (毒ヘビ) *No Cami se diz Cuchifami.* (Cami ではクチハミという)

現代ポルトガル語に「bibora」という語は見られない。ポルトガル語の語源辞典である DICIONÁRIO ETIMOLÓGICO NOVA FRONTEIRA DA LÍNGUA PORTUGUESA を見ると、「víbora」の項に、「réptil ofídio, da fam. dos viperídeos ou cobrídeos (マムシ科、コブラ科の爬虫類へび)」という説明書きがあり、16世紀のつづりとして「bíbora」があげられている。16世紀の宣教師たちは、「Firacuchi」をマムシ科の毒ヘビと正確に認識していたのである。

秋山には、「「ヌシャ何バシ言ウカ」「顔バシ アローテキタラ ドギャンナ」などと、強調して言うとき「バシ」という」とある。しかし、後者の「バシ」は「顔でも洗ってきたらどうだ」と訳することができる言語要素で、「顔」を強調しているわけではない。

VOCABVLARIO には、

*Baxi. Particula que no falar commum alguãs vezes se ajunta a alguns verbos, sem mudar nem variar o sentido que tẽ.* (普通の会話で、その意味をかえることも変化させることもなく、時々いくつかの動詞と一緒に助辞)

とあり、例として、「Qiribaxi funa. *Não corteis.* (切るな)」と「Nantobaxi gozaru ca? *Como he?* (どうだ)」とがあがっている。「*Não corteis.*」は、動詞「cortar (切る)」の接続法現在の二人称複数形で、二人称に対する命令をあらわし、そこに否定時の「*Não*」がついている。「*Como he?*」の「*como*」は英語の「*how*」で、「*he*」はポルトガル語のコピュラ「*ser*」の直説法、現在の三人称単数「*é*」の古い表記で英語の「*is*」にあたる。どちらのポルトガル語にも「*baxi*」は訳出されていない。「*Qiribaxi*」と動詞に後接しても、「*Nantobaxi*」と「なんと」についても、意味に変化は与えないとしているからである。

João Rodriguez は日本語の文法書 ARTE DA LINGOA DE IAPAM で助詞の「は」について何度もふれ、「*particvlas articvlares* (格助辞)」の節ではその冒頭で取り上げている。第149葉では「*Va* (は)」について、「*não tem outra significação, mais que ser pura particula que se ajunta a todas as partes da oração, ainda aos de mais artigos com varios, e elegantes sentidos* (単なる助辞としてあらゆる品詞についていろいろなエレガントな意味をそれぞれに加える以上には何の意味もない)」、つまり、「日本語をエレガントにするが、「は」それ自体には意味がない」、第139葉の裏では「*Voba, Va, tem certa energia, elegância que o vso ensinará* (「をば」や「は」は確かな力がありエレガントで、それは使用が教えてくれる)」、つまり、「使っているうちに使えるようになる」と述べている。「*Va*」の記述にかなりの紙幅をさいていることから見て、Rodriguez は「は」の意味や使い方、その重要性を認識していたと思われる。「エレガントだ」「使っているうちに使えるようになる」という記述はつかみどころがないが、教育的に考えれば適切なものかもしれない。VOCABVLARIO の「*Baxi*」の記述も同じである。日本語教育の立場からすれば、「時々動詞につき、意味はない」は簡潔で、わかりやすい。

### 3-3 「X、Ximo」の注記がないもの：現代熊本方言と意味、用法に違いが見られるもの

秋山によると、熊本の昔風の言い方では魚を数えるときに「イッコン」という。これは、VOCABVLARIO に記述が見られ、

*Icon. Modo de contar peixes, & vezes de vinho.* (魚を数えるとき、酒杯を数えるときのやり方) ¶ *Iconuo móxi aguru. Dar banquete a peboa alta, & de dignidade.* (身分の高い、高貴な方に宴を饗する)

とある。酒杯を数えるときに「一献」というのは地域的な言い方ではないが、魚を数えるときに「イッコン」というのは、現代においては方言である。「宴」の意味は、共通語においても九州方言においてもすたれているようである。

秋山によると、「九州西部を通じてネマルは食物の腐敗をいう」。VOCABVLARIO の「Nemari」の記述は以下のとおりである。

*Nemari, u, tta. E/ta /sem falar nada.* (何も言わないでいる) ¶ *Nematta fito. l, nemarimono. Homem calado, & /agaz.* (黙っていて狡猾な人) ¶ *Item, começar/e a danar, ou e/ta /sentido o peixe, &c.* (魚などがくさりはじめる、くさりかけている) ¶ *Vt, Vuo, mochi, mexi, nadoga nemaru. Danar/e o peixe, Mochis, &c.* (魚やもちなどがいたむ)

「何も言わないでいる」という語義に関して、秋山は何も述べていない。VOCABVLARIO の記述に「X」の注記はない。当時「ネマル」は方言ではなく、しかも、「食べ物がくさる」、そして、「何も言わないでいる」の両義があったということになる。

秋山が、「物を貯蔵すること」を意味するとしている「タポー、タブー」をVOCABVLARIO で見ると、

*Tabai, ò, òta. Guardar bem, & con /eruar.* (しっかりたくわえ、保存する) ¶ *Inochiuo tabò. Guardar, ou poupar a vida.* (命をまもる、大事にする) ¶ *Conomi nadouo tabò. Guardar fruta, & outras cou/as.* (果実などのものをたくわえる)

とある。17世紀初頭の記述にあった「命をまもる」という語義は現代熊本方言には残っていない。

「Bacai (バカウ)」を VOCABVLARIO で見ると、

Bacai, ò, òta. *Comprar, ou tomar como por força, & a porfiar com outros.*

(買う、力づくでとる、他と争う)

とある。「力づくでとる」という語義は現代熊本方言に残っているが、「買う」という語義は残っていない。

熊本方言で、「サカシカ」は「狡猾だ」という意味で使われる。VOCABVLARIO の記述を見ると、その語義は「力強い、健康だ、強いなど」と Cami で使われる場合の「思慮深い」、「狡猾だ」の三つである。

Sacaxij. *Valente, fão, & forte, &c.* (力強い、健康だ、強いなど) ¶ *Item, No cami he o me/mo q̃ Caxicoi, prudente, & sagaz* (同様に、Cami では「Caxicoi」と同じく、思慮深い、狡猾だ)

現代熊本方言の「サカシカ」では Sacaxij の三つの語義のうちの「狡猾だ」以外の語義は消えてしまった。Cami での語義が熊本に残ったということであろうか。

「Sacaxij」の記述に見られる「*prudente & sagaz*」という語義は、「Sufudoi」にも見られる。

Sufudoi. *Muito prudente, & sagaz juntamente com algum rigor, & a/pereza.* (いくぶん厳しさ、厳格さをともなって非常に思慮深い、狡猾な) ¶ *Item, Valête, & brio/ô.* (また、自尊心の強い、高慢な)

秋山には、「豊前、豊後で、すばしっこいことを「スージー」とか「サジー」というのは、このススドシの変化である。熊本では、このすばしっこい意をずるい意に転じた。」とあるが、「sagaz (狡猾な)」という記述があるところを見ると、熊本の「ずるい」という意味はすでに16世紀の「Sufudoi」にあった

ことがわかる。

これらの5語は、16世紀のイエズス会士たちによって **Ximo** の方言とはみなされていなかった。「**Nemari**」の語義には、「何も言わない」「くさる」の二つがあり、後者のみが熊本方言に残った。「**Icon**」には「魚を数えるとき使う」「酒杯を数えるとき」「宴」の三つがあり、第二義は共通語に、第一義は熊本方言に残り、第三義は残っていない。「**Sacaxij**」には、当時の共通語的な意味と **Cami** の方言としての意味とがあり、「**オゾム**」は当時の共通語的な意味「目をさます」を引継ぎ、「**サカシカ**」は **Cami** の方言としての意味「狡猾だ」を引き継いだことになる。

### 3-4 「X.、Ximo」の注記がないもの：現代熊本方言と意味、用法がことなるもの

ここでは、「**Fiõrõ**、**Fõgueta**、**Iinben**、**Xicori**、**Xebiracaxi**（ヒョロ、ホーゲタ、ジンベン、シコル、セビラカス）」の5語を取り上げる。

秋山は、「ヒョロ」を「鶏のヒョロ」と紹介し、「兵糧」のことで、「エサ」を意味すると書いている。「人間にもいう」とはあるが、もともとの「兵糧」から鶏の「エサ」に中心的な語義がかわったのは事実のようである。

VOCABVLARIO の記述を見てみると、

**Fiõrõ**. l, feorõ. *Tçuamonono cate. Matimeto dos soldados.* (兵士の食料) ¶  
**Fiõroni** tçumaru. *Faltarem os mantimentos.* (食料が不足する) ¶ **Fiõrõga**  
 tçuquuru. *Acabarem/e os mantimentos.* (食料がつきる) ¶ **Fiõrõuo** comuru.  
*Meter mantimentos, ou virtualhas na fortaleza.* (食料や食糧をたくわえる)  
 (「l」は「あるいは」ということを示している)

「トリのエサ」という語義は見られない。16世紀以降、熊本の民衆に溶け込み、日常生活の用語として取り込まれていったのだろうか。

秋山には、「ホーベタ・ホオのことをホーゲタ・ホゲタという」とある。一方、VOCABVLARIO の記述は、

**Fõgueta**. *Queixos de cima, ou queixdaas.* (上のあご、あるいは、下顎)

とあり、「ホオ」の意味はない。なお、この「queixdaas」は「queixadas」の誤植と考えられる。

秋山には、「小さな子供が一人で汽車やバスを乗りついで遠方の家まで遊びに行くと「ジンベン来たな」という。うまくやれるかどうか分からないことを首尾よくやりおおせたとき「ジンベン」という。」とあるが、VOCABVLARIOには、

*Iinben. Cow'a rara, & marauilho/a.* (まれで、すばらしいこと) *Vz Iinbenuo guenzuru. Fazer milagres, ou marauilhas.* (奇跡やすばらしいことをする)

とある。この記述からは、まさに「神変」であり、日常的なことをうまくやりおおせた、というより、神のなした奇跡、といった意味が読み取れる。宗教的な意味合いを持った語が、日常的な方言になったということだろう。

現代の熊本方言で「シコル」というと、「そぎゃんしこって、どけ行くと? (そんなにかっこつけて、どこへ行くの?)」のように「かっこうをつける」という意味であるが、VOCABVLARIO にそのような記述は見られない。

*Xicori, u, otta. i, Cori catamaru. E/tar embebido nalgũa pratica, ou pen/amento.* (何かしらの実践や考えに夢中になっている) ¶ *Xixiga xicotte iru. E/tar o porco do mato muito quieto, & diçimulado sem se bulir como a/anhado.* (いのししがひどく怒ったようにとても静かにじっと身を隠している) ¶ *Ninjuga (人数) xicotte iru. E/tar a gente unida, & como fechada contra os inimigos.* (人が敵に対して身構えるように、一つになっている) ¶ *Chanoyuuo xite fixxicoru. Dar/e, & entregar/e de maneira ao exercicio de Chanoyu, que parece se esquece de tudo mais.* (すべてのことをわすれるほどに茶の湯の稽古に献身し、専念する) ¶ *Cotoi (強健な牡牛) tçuqi xicoru. E/tarem os touros com a te/ta encontrados hum pera outro sem se bulir.* (牡牛が互いにじっと角を突合せている) ¶ *Diz se tambê de dous exercitos que tem as lanças enra/tadas hum pera o outro sem se a cometerem.* (攻撃することなく互いに槍をかまえる二つの軍隊についていう) *Vz Yariuo tçuqi xicotte iru.*

語義にも例文にも「かっこうをつける」という意味は見られない。

秋山の「セビラカス」の項を見ると、「からかうことを「セビラカス」とか「セブラカス」という。子供の目の前で菓子をヒラヒラさせて、子供が手をだすとパッとひっこめたりしていじめていると「ソギャン子ドンバ、セビラカスナ。カンノツクシエン」(天草)としかれる。」とある。『日本国語大辞典』の方言の欄には、「熊本県天草郡「いじめる」、玉名郡「嘲弄(ちょうろう)する。からかう。」とあり、秋山の記述を裏付ける。力の強いものが弱いものをじらしてからかうことを言うようである。

ただ、VOCABVLARIO には、

*Xebiracaxi, fu, aita. Zombando afligir, ou dar que entender a alguém, como impondo lhe algũa cou/a que lhe dà no coração, &c* (ばかにして苦しめる、あるいは、心に残るように何かしらを押し付けるようにして無理やりわからせる等), *no Ximo se diz, Yeracafu.* (Ximo では「エラカス」と言う)

とあり、「いじめる、からかう」などよりは深刻なようである。また、「*no Ximo se diz, Yeracafu*」というところを見ると、九州方言なのは「エラカス」であり、「セビラカス」は九州方言ではなさそうである。

さらに、VOCABVLARIO で「Yeracafu」を見ると、

*Yeracaxi, fu, aita. Zombar de alguém fazêdo he algum mal, & molestando o* (誰かに何かしら悪いことをしたり、病気にしたりして苦しめる) : *mas a propria palavra he Xebiracafu.* (しかし、適切な語は「セビラカス」である)

16世紀には中央語であった「セビラカス」が、方言として熊本に残っている、ということであろう。

VOCABVLARIO の記述と現代熊本方言とをくらべると、「兵糧」「神変」といった漢語が日本語に取り込まれ、日常的な語に変化をとげたことが分かる。「Xicori」に関しては、いつどのようにしてその語義を変え、「かっこうをつけ

る」ことを意味するようになったか不明である。

#### 4. 考察

以上、30語 (Fogaxi、Nauoxi、Fairiô<sup>v</sup> ; Cobu、Vacudô、Vangui、Yeda、Voro、Muzô ; Benifaxiyubi、Vôdoxi、Fu、Fauaqi、Vozomi、Yezui、Atadani、Igaua、Firacuchi、Baxi ; Iccon、Nemari、Tabai、Bacai、Sacaxij、Susudoï ; Fîorô<sup>v</sup>、Fôgueta、Iinben、Xicori、Xebiracaxi) に関して、現代熊本方言と VOCABVLARIO の記述とを見くらべてきた。

VOCABVLARIO の記述に X、Ximo の註が付されているのは6語だけであった。この6語のうち、語義に変化がないと思われるものが3語 (Cobu、Vacudô、Vangui)、違いが生じているものが2語 (Yeda、Voro)、語義が変わってしまったものが1語 (Muzô) であった。また、X、Ximo の註が付されていない21語では、語義に変化がないと思われるものが10語 (Benifaxiyubi、Vôdoxi、Fu、Fauaqi、Vozomi、Yezui、Atadani、Igaua、Firacuchi、Baxi)、違いが生じているものが6語 (Iccon、Nemari、Tabai、Bacai、Sacaxij、Susudoï)、語義が変わってしまったものが5語 (Fîorô<sup>v</sup>、Fôgueta、Iinben、Xicori、Xebiracaxi) であった。

秋山氏が肥後方言だと言っている27語のうちの20語を VOCABVLARIO は九州方言だと言っていない。16世紀当時は全国共通であった語が、その後、方言的な意味、語義を発展させていったのかもしれない。

もう一つ考えられることは、「X、Ximo」の注記は九州の方言語彙の中でも、とくに必要な場合にだけ付された可能性である。迫野虔徳はその著『文献方言史研究』、第7章「方言語彙史」、第2節「九州方言の語彙—日葡辞書の「下」注記—」で、「宣教師たちは、できるだけ正雅な京都の標準語を話すように心がけていたために、使ってよいことばとつかってはいけないことば(標準語と方言の区別など)をあらかじめ心得ておく必要があった。また、信者の懺悔を聞いて理解するためにも、方言についての知識は必要であった。」、さらに、「日葡辞書に「下」(九州)の注記を付して、多くの方言語彙を収録したのは、右のような必要があったからである。」と、述べている。

九州方言だからというのではなく、九州方言で使ってはいけない語だから「X、Ximo」をふったということになる。馬場(1999)は、ロドリゲスの日本



文典における「eleganxia」は、大量にある記述の中のとくに重要で学ぶべき事項のマークであると述べ、「sonsonete」は身につけてはならない発音上の特徴をマークしていると述べている。

VOCABVLARIOの「X、Ximo」という注記は、日本文典における「eleganxia」、「sonsonete」と同様、宣教師たちの日本語学習のためにイエズス会士が考案した、語学上の実践的な意味合いをもつ記号なのである。

この一文は、熊本県立大学学長特別交付金による学際型研究「天草プロジェクト」の助成を受けた研究の一部である。

#### 参考文献

1. VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM, 1603、オックスフォード大学ボードレイ文庫蔵のマイクロフィルム
2. João Rodriguez, ARTE DA LINGOA DE IAPAM, 1604、オックスフォード大学ボードレイ文庫蔵のマイクロフィルム
3. DICIONARIO ETIMOLÓGICO NOVA FRONTEIRA DA LINGUA PORTUGUESA, 1982、Editora Nova Fronteira
4. 『日葡辞書』1973、勉誠社
5. 『邦訳 日葡辞書』1980、岩波書店
6. 秋山正次『肥後の方言』1979、桜楓社
7. 『現代ポルトガル語辞典』1996、白水社
8. 『日本国語大辞典 第二版』2001、小学館
9. 『古語大辞典』1999、角川書店
10. 迫野虔徳『文献方言史研究』1998、清文堂
11. 馬場良二『ジョアン・ロドリゲスの「エレガント」』1999、風間書房